

ワスレノコリ

三枝希望

登場人物

女（韓国からの旅行者）

しーちゃん（民宿の娘）

勝子（長女）

真美（次女）

あい（三女）

久子（三人姉妹の叔母）

京子（久子の娘）

海近くの民宿の一室

二階の十畳ほどの部屋の中には北向きの窓があり、そこから身を乗り出せば坂の下にようやく夕日の海が見える。

民宿の裏手は山の斜面が迫り、寒い海風がどふぎふと木を揺らす。

その音で波音は聞こえない。

秋の深まった夕方。日が翳る頃。

室内は色褪せた畳、押し入れと、金庫と鏡台。床の間に上にテレビ。その上にビデオカメラが一台置かれている。

突然の叫び声。

部屋には女が三人、二人の女（久原勝子とこの民宿の経営者の娘しーちゃんと呼ばれる）は部屋の隅に置かれた小さなダンボール箱を見つめている。ダンボール箱からはタオルケットがこんもりとはみ出しており、傍らには石油ファンヒーターが箱を暖めている。もう一人の女は箱から離れた布団の上で荒い息をしている。

女 （意味のわからない言葉とあえぎ声で何かを訴える）……………。

久原勝子 （傍らの女に）ちよつと、しーちゃん……………。

しーちゃん （おろおろと）え……………。

勝子 （布団の上の女を見て）ほら、あの子……………。

しーちゃん （箱の中を見つめて）……………でも……………。

勝子 ……もう……………あなた、ほら、やつぱり……………。

勝子は布団の上の女に近づき背中をさする。

勝子 ねえ・・・びっくりするわよね。

女 (吸い込む息が荒くなる)・・・。

勝子 ちよつと、あなた、また？ ちよつとしーちゃん。

しーちゃん はい？

勝子 またよ、バス停の時と同じ。紙袋か何かない？

しーちゃん え、え、(箱の中の猫が気になる)

勝子 過換気何とか言う奴。息の吸い過ぎ。

しーちゃん 紙ですか。

勝子 紙袋・・・。

しーちゃんは仕方なく立ち上がりあたりを探す。

しかし、女の息は通常に戻りつつある。

勝子 あ、もういいかも。

しーちゃん (ちよつと怒る) もういいならいいじゃないですか。

勝子 何言っているのよ？ あなた。

しーちゃんは、猫の入ったダンボールを再びのぞき込む。

勝子 (女に) もう大丈夫？

女 (頷く)・・・。

勝子 もう少し横になっていたら？

女 (首を振る)・・・。

勝子 ね、・・・びっくりするわよね、目が覚めたら死にかけの猫が居るんだから。

しーちゃん そんな言い方しないで下さい。

勝子 ああ、ごめんなさい。

しーちゃん (箱に向かって涙ぐむ) 勝子さんがそんなこと言うなんて・・・。

勝子 悪かったわよ。でも、何もここに置かなくても・・・。

しーちゃん 先月母が入院してからアラン具合もおかしくなりました。それが昨夜突然・・・。

勝子 昨夜？

しーちゃん 昨夜・・・急に息が止まって、動かなくなったりするんです。

勝子 はあ・・・でもあたしが今朝来たときはそんな様子じゃなかったんじゃない？

しーちゃん それはそのときはそうだったけれど、昨夜からなんです。

勝子 ああ、そうなの・・・。

しーちゃん 私、母が入院してからずっと考えていたんです。アランが、元気になれば母も元気にな

るって。だからあたし一生懸命に看病しているのに・・・。

勝子・・・しーちゃん、ひよつとして獣医さんに連れて行ったりした？

しーちゃん いいえ・・・以前もアラン、こんなことがあって・・・そのときは一晩入院してどうに

か持ちこたえたけれど、今度こんなになったら、無理して入院させるよりお母さんと看取ってあげ

なさいって・・・。

勝子・・・ねえ、おかしくない？ 何か・・・。

しーちゃん 何がですか？ アランが元気になれば、いいんでしょう。そうすれば母と一緒にアランを

看取ることができないじゃないですか。

勝子・・・しーちゃん、やっぱり私買い物に行くわ。

しーちゃん　でも、勝子さんはお客さんですし。

勝子　そりやそうだけれど、お客の部屋にその・・・大事な猫入れる？

しーちゃん　すいません。でも、あたし一人ですから、心細くて・・・。

勝子　と言うことは、あなたもこの部屋に居るってこと？・・・いいわよ、別に。あたしは気にしてないけれど・・・。

しーちゃん　駄目ですか・・・。

勝子　妹たちは猫嫌いでもないし、アラン拾ってきて名前付けたのはなによりうちの母だしね。ただ、

久子叔母がどうかしらね。

しーちゃん　久子叔母さんて、相変わらずですか・・・

勝子　変わっていないわよ・・・めんどくさいわね。

しーちゃん　駄目ですかね。

勝子　そりや・・・わからないわよ。

しーちゃん　・・・急に、アランがこんなになるなんて・・・。

勝子　・・・どうしてかしらね、アランちゃん。

しーちゃん　もうおじいちゃんだから。

勝子　何歳だっけ？

しーちゃん　十三歳・・・。

勝子　そんなに・・・そんなに昔だった？・・・あんだ、そうか・・・うちの母が拾ってきたとき高
校入ったばかりの時だったわね・・・十三年か・・・それだけ生きてたら猫って化けるとか言わない？

女が更に猫から距離を置く。

勝子 (それを見て女に小声で) わかる? 化け猫?

女 (曖昧に頷く) . . .

しーちゃん (むっとして) 買い物、行きますから、見ていて下さい。

勝子 いいわよ、私が行くから。用事もあるし。

しーちゃん 母にきちんと皆さんの面倒見るように言われてますから。

勝子 (しーちゃんにゆっくりと) . . . オバサン . . . 病院 . . . まだ?

しーちゃん . . . はい。

勝子 . . . しーちゃん、病院から何か連絡あった?

しーちゃん え?

勝子 例えば . . . お母さんの様態とか?

しーちゃん 母が、お相手できずにすいません . . .

勝子 そう . . . オバサンに言っちゃ駄目よ。アランのこと . . . 。それよりほら、ちゃんと看病しなけりや。

しーちゃん (急に涙ぐんで) ごめんなさい . . . せっかく今年は皆さんで集まろうって言うのに . . .

勝子 いいわよ . . . 私が行くから . . .

しーちゃん でも . . . お客さんですから . . .

勝子 いいの、あたしたち親戚みたいなものなんだから。水くさい . . . それに妹たちにバス停で会うかもしれないし . . . (女に) あなた気にしないでここにいていいから。

勝子が立ち上がるとその服の裾を女が引つ張る。

女 あのこと。

勝子 いいの、あんたは。ここにいていいの。あたしが許す。だってご飯でも一緒に食べましょうって約束したもののね。

しーちゃん あの、その人言葉わかるんですか。

勝子 わかるわよね。バス停からここまで来たときおはなししましたものね。あなた、すこしは、日本に居たことあるんでしょう。

女 いえ・・・少し・・・勉強しました。

勝子 やっぱりね。でも上手よ発音が・・・留学で？

女・・・いえ・・・。

勝子 じゃあ、観光？

女 一人で？

女・・・友達が、こっちにいます。でも、連絡とれなくて・・・。

勝子 (しーちゃんに) まあ、いいわよ。なんだか困っているだから、仕方ないでしょう。

しーちゃん はあ・・・。

勝子 じゃあ、行くから。お金は後でいいからね。

しーちゃん ああ、駅前のマルヤマ青果でしたらお金は別に・・・。

勝子 いやね、お酒に決まっているじゃない。

しーちゃん あの・・・酒屋さんに電話すれば・・・配達・・・

勝子 さつき、散歩したとき駅前のスーパードで見つけたのがあるのよ。滅多にない焼酎が。だけどこの人抱えてたから・・・ね、(女に) あ、別にあなたのせいだなんていってんじゃないのよ。

女 いえ、でも、

勝子 もう・・・。

その時階下で「ごめん下さい」の音がする。

しーちゃん (階下に) はい・・・。

声 あの、久原勝子さんいらっしやいますか。

勝子 あ、はい。

声 皆さん公民館で、

勝子 (遮って) はい、わかりました。(しーちゃんに) あのちょっと急ぐのよ。

しーちゃん・・・。

勝子 ちょっと、あの、焼酎のことをお願いしてたのよ、なにせ幻だから、

女 あの、

勝子 (女に) ちょっと用事なのよ、すぐ戻るから。お願いだから待っていてね。(しーちゃんに) じ

ゃ、出かけるから。

しーちゃん すいません、皆さんがせっかく集まるって時に、アランが・・・

勝子 しつこいのよ、もういいって言っているでしょう。それより、この人のこと頼んだわよ。(女に)

あなたもおとなしく待っていてよ。

女 はあ・・・。

勝子 じゃ、ちょっと行ってくるから。

勝子は去る。

しーちゃんと女が所在なげに残る。

しーちゃん (女を見て戸惑ったように) はい？

女・・・はい？

しーちゃん はあ・・・。

女・・・何か。

しーちゃん (何を語ろうか戸惑って) おなか・・・空いています？

女・・・はい・・・。

しーちゃん ねえ・・・わかりますよね、言葉・・・さっき喋っていましたものね。すいませんね

こんなことになって。(猫をのぞき込みながらぼそぼそと) 何がなんだかわからない・・・。

女 (うまく伝わらなかったかと思いはつきりと) お腹すいています。

しーちゃん (もそもそと) え、ああ・・・そうよね・・・聞いたものね。

間

しーちゃん (もそもそと、猫を見て) ねえ、でも・・・、もうきょうだいみたいなものだからね。

どうすればいいのか・・・わからない・・・。

女 (以前の発音が悪いのかかと思いつくりと) お腹すいています。

しーちゃん ええ、わかりましたよ。そんなにはつきり言うもんじゃないでしょう、そんなこと。

女 でも、聞いたから、あなた・・・。

しーちゃん でもね、あなた、いわば・・・、あなたなんかお客じゃないんですから。

女・・・。

しーちゃん バス停のベンチでひっくり返っていたっていうから・・・。

女 気分悪かった。

しーちゃん 動けなかったって言うじゃない。息も荒くて……。

女 ……息吹いすぎた。ありがとうございます。

しーちゃん お礼なら私じゃないわよ。あなたをここまで抱えてきた人に言うべきよ。勝子さんじゃ

なけりやここまでしないわよ。

女 ……はい。

しーちゃん 私は救急車呼ぼうって言ったのよ。でもいろいろあるかもしれないからって……不法な

んとかとか……あるの？

女 ……。

しーちゃん まあいいけれどね、良くないけれど……わかるでしょう。うちだって、ボロだけれど

いろいろがんばっているんだから……。

女 (しーちゃんの言い方が気に入らない) 出て行ったらいいですか。

しーちゃん あなた……お礼も言わないで出て行くって言うの？ それがお国のやり方なのかしら。

お礼もしないでお腹が空いただなんて言うし……。勝子さんが戻ってくるまで待てないの？ 恩

人よあなたの、命の……大げさかもしれないけれど……。

女 いった戻ってくるんですか。

しーちゃん もうじきよ。たぶん……。

女、とげとげと、身支度を始める。

しーちゃん ちよつと……何よその態度。別にいいけど……出て行くならちちゃんと勝子さんが戻
ってきてからにしてよね。私が追い出したみたいじゃない。

女 外で待っています。

しーちゃん なによ、やめてよ、ちよつと・・・本当に・・・。

女 外に出ます。

しーちゃん やめなさい！

しーちゃんは、女の荷造りの手を止める。

しーちゃん やめなさいよ。謝るわよ、言い方が悪いって言うんなら。だけど、あなただって・・・
女 (しーちゃんを睨む)

しーちゃん ああ、あたしね、こんな言い方が駄目だって言われるのよね。謝るんなら、後から付け足しせずに謝るだけにしなさいって。

女は興奮しているのか息を吸いすぎている気配。

しーちゃん ちよつと、やめてよ、こんなところで！

しーちゃんは、女の背中をさする。

女はようやく息が整ったが、しーちゃんはしつこくも背中をさする。

女 もうだいじょうぶですから。

しーちゃん いやよ、ここでどうにかなられたらかなわないもの。

女 痛いの。

しーちゃん そう？ でもこのくらいのカじゃないと・・・ちょっと弱めたけれど、このくらいでいいんじゃない？

女 もう、いりません。

しーちゃん そう・・・大丈夫？

女 （しつこさにたまらず、素っ気なく）ありがとうございます。

しーちゃん （その言われ方に戸惑いながらもむっとする）ええ・・・。

間

かさこそと、段ボールの箱から音がする。

しーちゃん アラン！

しーちゃんが駆け寄ると、階下で電話が鳴る。

しーちゃんは戸惑いながらも女の手を取り、段ボールの箱のそばに座らせる。

しーちゃん （言葉をはっきりと）アランを見ていてください。動かなくなりそうになったら、ちょこんと突っついてみて下さい。生き返るから、ね。大丈夫とは思いますが、わかんないし・・・。

女 （頷く）

しーちゃんは去る。

女が一人残り、箱の中を見つめる。

泣きそうなくらい、猫が嫌いなのか・・・むしろ死にかけの猫の魔性が怖いのか・・・
女は、不安げに辺りを見回している。

やがて、決心したかのように、荷物をまとめ、この部屋を出て行くこうとする。

そこへ、女の旅行鞆の中から携帯電話の呼び出し音が鳴り、女はその電話に飛びつく。

女はしばらく小声で喋っているが、だんだん声が大きくなる。(韓国語で)

女 　　「だから大丈夫・・・お母さんだって体気をつけてよ。うん、友達のところ・・・言っただしよ

う、何度も・・・商業高校の同級生・・・大丈夫だから・・・迷惑じゃないの、旦那さんは・・・

今仕事に言っている・・・迷惑じゃないって・・・今みんな買い物・・・あたしだけ・・・うん・・・

留守番・・・嘘ついてどうするの！ 帰ります・・・約束したでしょう・・・そうだけど・・・大

丈夫、帰ります・・・(怒鳴る)お母さんを見捨てるわけじゃないの！ そんなこと言わないで・・・

大丈夫だから・・・大丈夫・・・帰るわよ・・・もうじき・・・たぶんすぐよ・・・だから・・・

大丈夫だから・・・」

女は電話を耳から離し、しばらく見つめてボタンを押し、通話を切る。

気を落ち着かせるためか、大きく息を吸い、ゆっくりと吐き出す。

先ほどより、女の背後、入り口のところでもう一人の女(岩本京子)が女を見ていた。

京子は、無遠慮に女の前を通り過ぎ、荷物を置き座る。

女は京子を見つめる。

京子 ケンチャナヨって、大丈夫って意味でしょう、確か・・・
女

京子 しーちゃんに聞いた。少しはしゃべれるんでしよう。
女・・・。

京子 何か言いなさいよ。

女・・・何か？・・・。

京子 何が大丈夫なのよ。

女・・・わからない・・・。

京子 母親と話していたの？

女 (むっとして) 《あんたに関係ないでしょう》

京子 何よ。

京子は、死にかけの猫の段ボールをのぞき込み無遠慮に猫をつついてみる。

女 (気味悪そうに) 《よしなさいよ》

京子 ケンチャナヨ！

女 《大丈夫じゃないでしょ！ 死にかけているんだから！ 気味悪いじゃない！ 触らないで！

猫にとりつかれたらどうするのよ！ 気味が悪い！》

京子 何言っているかわかんないわよ！

女 やめてください！

京子 はあー？ 猫嫌いななの？ (わざと猫を突く)

女 《よして！》

京子 (その反応を見てさらに突く)

女 (甲高い声を上げる)

そこへしーちゃんが叫びながら飛び込んでくる。

しーちゃん（京子を押しつけ、猫の入った段ボールの顔をしばらくつつこんで京子に）京子ちゃん、何かした？ したでしょう・・・あなた、うちに来るたびにいつもアランをいじめていたでしょう。この子が人見知りしないし怒らないからって、ねえ、何したの？ この子に何したの？ 病気のなのよ。

京子・・・なにもしてないって。

しーちゃん 嘘！

京子・・・生きているかなって思って突いてみただけでしょう。

しーちゃん 触らないでって言ったじゃない。

京子 聞いていないわよ。

しーちゃん 言ったじゃない、下で、あんたが入ってきたとき。

京子 あ、そう・・・だから死んでたらいやじゃない。だからちよつと触っただけでしょう。

しーちゃん そんなこと言わないで・・・そんなこと・・・。

京子 なによ、もう・・・何もしてないってば。

しーちゃん（女に）この子何かひどいことした？

女・・・。

しーちゃん あなた、叫んでいたじゃない。

女（指で突く仕草）

しーちゃん 何したの？ はっきり言ってよ！ しゃべれるんでしよう。

女（しーちゃんの剣幕にたじろぐ）

京子 だからちよつと触っただけだってば。

しーちゃん あんたみたいなのが触ったら死んじやうのよ？ 昔からそうよ、アランばかりいじめて、私が嫌がるのをおもしろがっていたでしょう。私を馬鹿にして……。

京子 悪かった！ アランがかわいそうでちよつと触っただけじゃない。謝るわよ。

しーちゃん 当然よ！ この前来たときの分も謝ってもらうから。

京子 この前っていつのことよ。

しーちゃん あんたが小学生の時……初めてここへきたときのこと。

京子 えー！

しーちゃん あたし、お母さんが京子ちゃんに触らせてあげなさいって言うから、私、嫌な予感がしたんだけど、我慢してあなたに抱かせてあげたのよ。私、心配で心配で……なのにあなたの方を見てアランの尻尾を爪でギュッてしたのよ。あなたそのとき笑っていた。

京子 ……だって……。

しーちゃん だって何？

京子 あんたの引きつった顔がおもしろかったのよ、たぶん……今みたいに。

しーちゃん (京子の首を絞めようとする)

京子 (さっと逃げて) ばっかみたい。付き合っていられない。

しーちゃんがさらに京子を追おうとするところへ女が間に入る。

女 ≪そんなに怒らなくてもいいでしょう。京子さんも≫

しーちゃん 何よ。

女 しーちゃん……怒らないで……私、ちよつとびっくりしただけ。

京子 そう、ゴキブリでも出たんじゃない？

しーちゃん ゴキブリくらい何よ！ ちゃんと見ていて下さいって頼んだじゃないの！

女 ゴキブリ？

京子 ムシよ。

女 ……わからない。

間

京子 (女に) なんて言うのかな…台所…キッチンに出る虫のこと。てかてか光っていてシ

ユルシユル素早く動いて、こんな古い民宿におきまりの虫。

女 はあ…ああ(何となくわかった様子で辺りを見回す)

しーちゃん ゴキブリなんてどうでもいいの！

京子 あ、そう。

間

階下より、「しーちゃん…しーちゃん」と呼ぶ声。

しーちゃん ……。

しーちゃんは黙って猫の段ボールの箱に向かい、タオルケットをかけ直し、猫をそつと撫で始める

再び「しーちゃん・・・しーちゃん」と呼ぶ声。

京子（階下に向かって）はーい。

京子は階下に降りてゆく。

女は、しーちゃんの後ろに離れて座り、背中を見ている。

女 猫・・・大丈夫ですか。

しーちゃん・・・。

女 ごめんなさい。私猫、嫌いで・・・。

しーちゃん 何で？

女 猫・・・魔物だから・・・そう聞いていたから。

しーちゃん（猫を撫でながら）どんな生き物だつてずっと暮らしていたらお互い頼り合うのよ。ど

うしようもなくね。だから愛しくて・・・でも私・・・（何かを思い出している）

女 何ですか？

階下より京子と話をする女達の声がする。

声（真美） 何よ、しーちゃん居るんでしよう。

ゆっくりと旅行用の荷物を抱えた女が二人入ってくる。勝子の妹の久原真美（次女）佐藤
あい（三女）

真美 居るなら返事してよ、あたし達、六年ぶりで来たって言うのに、

二人は女の姿を見つけ、少々戸惑い、互いに会釈を交わし、しーちゃんの後ろ姿を見ながら荷物を部屋の隅に置く。

真美 (あたりを見て) 昔からボロだったけれど、より一層って感じね。
あい (しーちゃんに近づき声をかける) しーちゃん・・・久しぶりね・・・。

あいは猫のダンボールを覗きこみ、真美の所に戻る。

あい 京子ちゃんの言ったとおりね。猫、居る。

あいは再びしーちゃんの所は行こうとするのを真美に止められる。

真美 (あいに) ああ・・・少し、そつとしておいたら。

あい でも姉ちゃん・・・。

真美 それより、(女を見て) ちょっと、あなた、

あい よしなさいよ。

真美 何で？

あい 何でって、知らない人じゃない。

真美 だからでしょ。

女、所在なげに再び二人に会釈する。

真美 あなた、関係者？

女・・・(首を振る)・・・。

真美 ああ、そう・・・(階下に向かって)京子ちゃん・・・。

返事がない。

真美 ・・・・どこ行っちゃたのかしら。

あい (傍らの荷物に触れて)しーちゃん、勝子姉さんどこに行ったの。

しーちゃん (猫を撫でながら)・・・買い物・・・。

あい どこへ？

しーちゃん (猫から目をそらさずに) 駅前のスーパー。

あい スーパー？

しーちゃん お酒を買いに・・・。

二人顔を見合わせる。

真美 また勝手なことを。(思い直したように)

あい しーちゃん、ほったらかしで？ ねえ・・・。

真美 しーちゃん、やっぱり、単刀直入に聞くけれど、

あい ずるい、そっとしておけて言いたくせに。

真美 ずるいとかそういうことじゃないでしょう。

あい (真美に) だって、変に刺激しちゃ、あれじゃない。

真美 ・・・ (大きく息を吸って言いにくそうに) その猫、アラン・・・まだ生きているの？

しーちゃん (真美をにらむ) ・・・どうしてみんなアランのことをそんなふうにするの？元はといえ

ばあんたたちの母親が拾ったんでしょ。名前もおばさんが付けたのよ。いわば形見じゃないの。

真美 生きているのね・・・。

あい 形見ねえ・・・ (真美に) で、どうして猫がこの部屋にいるのよ。

真美 さあ・・・ (女に) あなたご存じ？

女 わかりません。猫、死にかけているって・・・。

二人は女の発音のおかしいのに顔を見合わせる。

そこへ京子がお茶セットを持って現れる。

真美 京子ちゃん、どこ行っていたのよ。

京子 お茶っ葉、探していたの。

京子はテーブルの上にお茶のセットとリンゴの入ったかごを置き、お茶の支度を始める。

真美 ああ・・・お構いなくって言うのもおかしいわね。

京子 (しーちゃんを見ながら) 何の用意もしていないの。あたしたちが来るって言うのに。リンゴ

くらいしか見あたらないの。

真美 そりゃまあ、しょうがないんじゃない？

あい 勝子姉さんなんて？

京子 あたしが来たときにはもう出かけた後。

真美 久子叔母は？ 一緒に来たんでしょう。

京子 パチンコしてから来るって。

真美 バス停の横の？ 出ないでしようあそこ。 地元の人だってほとんど寄りつかないみたいだし。

いつもガラガラじゃないの。

あい 勝子姉さんも行ってたりして。

真美 うるさいのよ、勝子勝子って。 あんたがいつもはつきりしないから姉さんに丸め込まれるんじゃないの。

あい でも・・・。

京子はお茶を二人に差し出し、次に女に渡す。

女 (受け取り) どうも・・・。

あい あの、京子ちゃん、(女を見て) その方、お知り合い？

女 別に・・・。

あい 別について？

女 しーちゃんから聞いたただけだけど、勝子さんがバス停で倒れていたところを介抱して連れてきたって。

真美 また、お節介なことを・・・で、あの方、言葉違うみたいだけれど、

あい (女に丁寧) こんにちは。

女 こんにちは。

あい ええと・・・(京子に) お話しできるかしら。

京子 少しくらいなら(女に) できるんでしょう。

女 少し・・・。

あい 少しねえ・・・どこから来たの？

京子 韓国でしょう。

女 ええ。

あい ソウル？

女 (首を振る) ○○・・・。

あい ・・・んーわからないわね。どんなところ？

女 こと似ています。海が近くて・・・山があつて、

あい 田舎なのね。

女 はあ・・・。

あい (真美に) 田舎なんですって。

真美 ちょっと話しくいわよね。

あい お話してできるじゃない。

真美 そうじゃなくて、しーちゃんが居ると・・・それに、関係ない方も・・・。

女 そうなんです。私関係ないけど・・・。

真美 関係ないけど、何よ？

女 はあ・・・(どう説明すればいいか悩む)

真美 はつきりしないのね。

あい そんな風になんて言わなくてもいいじゃない。外国の人なんだから。

真美 で、(京子に) しーちゃんずっとここに居るの？

京子 さあ・・・。

真美 (わざとらしく) しーちゃん、あたし達三時間も電車に揺られてお昼食べそびれちゃっておなかすいているんだけれど・・・晩ご飯の支度そろそろしなくちゃいけないんじゃない？

あい (座卓にあるリングを見て) リングでも食べたなら。そのぐらいしかないでしょう。

真美 リングじゃないでしょう。

あい あたし剥こうか。姉さん下手だから。

京子 あたし剥こうか。暇だから。

真美 食べたくないの、リングなんか。しーちゃん、ほら、あたし達、ええと、お客じゃない。

しーちゃん (ゆっくり立ち上がり、女に) ねえ、アランを見ていてくださいね。

女 私ですか？

しーちゃん そうよ。京子ちゃんには絶対触らせちゃだめよ。

京子 触りません！

しーちゃんはゆっくりと去る。

真美 (去ったのを確かめて京子に) あなた何かしたの？

京子 別に・・・ちよつと突いただけよ。

真美 そう・・・(皆に何か話を使用とするが、京子をみて思わず) 京子ちゃん、短大はまだお休みしているの？

京子 もうやめるつもり。

真美 あんた・・・もったいない・・・。

京子 そうね。

真美 ……そうねって、今年の授業料半分、久子叔母に貸したの私なのよ。

京子 もつたいないってそっちの方なの？

あい ごめんね、うちは余裕がなくて。ヒサノリ……子供が来年中学でしょう。だからね、とうとうマンションを買うことにしたから、

真美 (あいに) 今度はあんたのところの入学祝い？ (京子に) 言いたくないけど、久子叔母やあんたがどう考えてるか、きちんと、

あい やめてよ、今そんなこと……。京子ちゃんだって何か考えがあつてのことでしょう。

京子 別に、何もないけど。

あい ……そう……。

真美 (しばらく額に手を当てて) ちよつと、よく考えるから。ちよつと混乱しているからあたし。

間

女 あの、あたし……ここにいるのどうしてでしょう。

あい (リングゴ果物ナイフでをむき始める) 具合が悪くなつて運ばれてきたんでしょう、ねえ、確かそうだったわよね。

京子 うん。

女 あの、そうじゃなくて……。私、ここにいるのがいいんでしょうか。

あい あら、なかなか上手ね。こちらへは留学で？

女 いえ。

あい じゃ何？

女 ええ、

真美 そう！ どうしてあなたがいるの？

あい だからそれはさっき言ったじゃない、具合が悪くなつて、

真美 わかっている。わかっているのよそれは。でも具合は良くなつたんでしよう。

女 はい。

あい ああ・・・なぜなの？

女 なぜですか？

真美 わからないの？

あい わかった、しーちゃんに猫頼まれたから。

真美 頼まれたからとかそういうことなの？

女 わかりません。

あい 姉ちゃん何言ってるの？

真美 ・・・(女に) ええと、頼まれたのね・・・なら、ちよつとあつちで猫見ていてくれる。ちよつ

とこつちであたし達話したいことがあるから。

女 猫嫌いなんです。怖い。

真美 大丈夫よ。噛みついたりしないから。

女 怖い。

真美 (怒る) 頼まれたんでしようあなた！

間

あい (京子に) わかっているの？
京子 何が。

あい しーちゃんのこと。この人。

京子 知らないんじゃない？

あい わかった。知らないのね。説明するわ。実はその猫ね、

女・・・。

真美 ちよっと、関係ないでしょうこの人に。何でよけいなことというの？

あい だって・・・。(女から目をそらして) わかったわよ。

女 (突然大声で) ≪なんですか？ きちんと説明してよ！ あたしは何でここにいるの？ あんたたちは

私をどうしようって言うの？ はっきり説明してよ！ ≫はっきり言って！ あなたたちは一体誰で

すか！ ≪お互い名乗るのが礼儀でしょう≫

間

あい 怒ってんの？

京子 説明しろってことでしょう・・・たぶん・・・。

あい 猫の？

京子 そうじゃない？

間

あい (姉を見て) 猫ね、本物じゃないの。

女 ≪猫？ どういうこと≫ どうして？ ≪きちんと説明して！ 私さっぱりわからない！≫

あい (姉を見る) ほらお姉ちゃん・・・国際問題になっちゃう。

真美 ああ・・・だから・・・しーちゃんがそう思いこんでいるだけ。

女、京子とあいを見る。二人はそれとなく頷く。

あい だから、あの子昔から思い詰めてわかんなくなるタイプだったから。姉ちゃん、宝くじのこと覚えている？（女に）小学生の時にね、とてつもなく欲しいお人形があったんだけど買ってもえなかったのよ、しーちゃん。それでこっそり宝くじ買ってね、思いこみすぎて抽選日に当選したと思いきや、自分で電話しまくりよ。「宝くじ十万円当たりました。私にも真美さんにも何か買ってあげるわ」って。しーちゃんのお母さんが、この民宿経営してた人なんだから後で「間違いでした」って。でもあたし達も信用しなかったわよね。きつとケチになったんだろうって・・・それをネタに、真美ねえ、ここに来るたびにしーちゃんいびっていたわね。宝くじは？ 何買ってくれるのって。そのたびにお母さんと勝子ねえに怒られていたわね。

真美 うるさい。

女（真美に）《なんですか》

あい（京子に）あなたもだいたいじめたんじゃありませんか？

京子 さあ？

あい（女に）わかる？ 言っていること？

女（あいに）少し。（真美に）《よくわからない！》

真美 言うなら要点だけにしなさいよ。

あい ああ・・・それで、その、しーちゃんのお母さんが昨日の晩に亡くなってね、

女 《お母さん？》

あい で、彼女のお母さんとうちの母が、あ、名乗ります。あたし、佐藤あいと、姉の久原真美とあ

なたを介抱した一番上の姉の久原勝子の母が女学校時代の親友で、あ、あたしだけ旦那がいるから佐藤さんだけけど、あなたは？

女 ああ、〇〇〇と言います。(真美に) 何故、しーちゃん、猫だと思っているんですか。

真美 (あいが喋ろうとするのを抑えて) あの、要するに、しーちゃんは、病院から連絡受けてもまだ母親が死んでいないと思いきんでいるの。認めたくないのよね、だからそう思いきんだわけ。猫はね、去年老衰で死んじゃっているの。その猫の代わりに置いていたヌイグルミがあの子の頭の中で突然蘇った。母親とアランが死んだ時とシンクロしちゃったのよ。

あい そう、観光協会の人が病院との間にいてくれたんだけど、彼女、絶対嘘だって認めないし、病院にも行こうとしなくて、

真美 どう、わかった？

女 (額に手を当てて) わかるけど・・・よくわかりません・・・。

あい あの、それでバタバタしているでしょう。だからお通夜を明日にして、近所の人以外の知り合いついて言ったらうちぐらいのものだから会長さんから勝子姉さんが連絡もらつて。あたしたちも呼び出されたわけ。

女・・・はあ・・・。

真美 わかった？ だから、ほら、要するに猫はヌイグルミだから。あなたしーちゃんに頼まれたんだし、猫の番してないと、あの子戻ってきたらどうなるかわからないわよ。後はこつちの話。

女 でも、なぜ私ですか？ わたし、お礼したら、すぐ帰りたい。

京子 あれ、食事していくんじゃないの？

真美 なんです？

京子 しーちゃんがみんなであつて・・・。

女 私どうなるんですか。

真美 わからないわよ。まあ勝子ねえに巻き込まれた被害者でもあるわけだけどね、あたし達と同じ。

京子 (女に)ケンチャナヨ。

あい なにそれ？

京子 さあ。

あい (真美に) 駅前にそんな店できていたわね。

真美 そう？

女、その言葉を気にしながら皆から離れて猫のところへおそるおそる向かう。

すると階下から勝子の声

勝子 (声) あーみんなそろったのね。ご苦労様。

あい ちよつとおねーちゃん！

あいが下に降りていく。しばらく賑やかな話し声。声、あら、久しぶり。元気だった？
とうとう降り出したわ。大丈夫、濡れずにすんだ。走ったからね……。等々……。

間

部屋に残った三人は言葉を交わせない。

勝子が現れる。しばらくして、岩本久子、続いてあいが静かに入ってくる。

勝子 しーちゃん、下で寝ているから、静かにね。(女を見て) 大丈夫？

女 ……はい。

久子 あの子？

勝子 ええ。

久子 (女に) アンニョン・・・なんて言うの。

女・・・こんにちは。

久子 ああ・・・そっか、話せるんだ。

女 ○○○と言います。

久子 ああ、そう。

女 あの、(勝子に何か言いかけるが、久子に遮られる)・・・。

久子 (真美とあいを見て) 久しぶりね、ちよつとあわないと老けるわね。

真美 しーちゃん寝ている？ まあいいけど・・・。

久子 まだわかるうって心配はないの？

勝子 (妹たちに) あなた達、見ていてどうだった？ 話したんでしよう。

真美 どうだったって？

あい どうにもならない感じね。

真美 何とかヒステリーって言うんでしよう。もう医者に連れて行った方がいいんじゃない。

勝子 でも、お葬式がおわるまではねえ・・・。

久子 あたし、面と向かって言い聞かせようか。

勝子 だめよ。暴れ出すかもしれないし、宝くじの時みたいに・・・。

久子 そう・・・。まどろっこしいわね。かえって可哀想じゃないの。母親の通夜も葬式もわからな

いなんて。

勝子 わかっていて葬式に来ないよりましでしょう。

真美 私のこと？

勝子 別に・・・。

久子 やめなさいよ、あのときは真美だって仕事で抜けられなかったんだから。それはあんた達和解したんでしょう、確か・・・(部屋を見回して) ねえ、ちよつと荷物が多すぎない？

勝子 そうね、大きいものは隣の部屋に荷物を置きましようか。

久子 京子、あたしの運んでおいて。

京子・・・(目を合わずに久子の荷物を持つ)

真美 じゃ、猫のいないところで休ませてもらいましようか。

勝子 そうね、これから忙しくなるから。放っておけないでしょう。母さんの親友だったんだから。それにあたし達子供の時からここには世話になつてゐるし。

真美と京子は部屋を出る。

あい (行きかけて) おばさん、パチンコしてたの？

久子 だめね、あそこ。

あい 出るわけじゃないじゃない。あんなところ。(去る)

勝子 ほんと、あんな寂れたパチンコ屋なんて、観光客の暇つぶしですもの。バカみたい。

久子 その言い方・・・。

久子 あんたいくつになつた？

勝子 四十五。

久子 あんたの声、姉さんそっくり。電話に出た瞬間なんてどきつとするわ。似るものなのよね。

勝子 そう？

久子 気づかないのよ。パチンコ屋で肩たたかれて振り向いたとき、実は幽霊かと思つた。

久子、鏡台をのぞき込む。

勝子、お茶の支度。

雨脚が強い。

久子 (鏡を前にして) 皺・・・ねえ、年取って鏡を見るとつていう話・・・良く聞かされたわ。ほんと、だんだんその気配が漂うのね。夜中の鏡に自分がふっと映ったときなんか本当に嫌・・・そっくりなんだから。

勝子 よして、陰気よ。

久子 陰気な集まりじゃないの。お通夜に葬式・・・この二年で葬式だらけ・・・どうやって死ぬのがいいのかしら。

勝子 (お茶を久子に渡そうと近づくと) やめっててば。

久子 (鏡の中の勝子を見て) ホラ、そっくり。

勝子 (無視してお茶を置き、女の方を向く) ごめんね、ずいぶん待たせちゃったわね。お腹すいたでしょう。

女 あの、いろいろとありがとうございました。

勝子 いいのよ。

女 私これで失礼します。

勝子 何で？

女 行くところあるから。

勝子 どこへ？

女 行く所あります。

勝子 でも、雨みたいよ。

女
・
・
・

勝子 ねえ、ご飯食べましようって約束したじゃない。

久子 何もこんな時に・・・

勝子 (久子に) 約束したのよ。

女 でも、忙しいでしょう。しーちゃんさん、寝ているでしょう。

勝子 作るわよ、あたしたちが。

久子 あたしは嫌よ。

勝子 何で？

久子 疲れているから。それにあんた何も買ってこなかったんだろう。

勝子 だから、互助会の人と打ち合わせが長引いてね、でも何かあるわよ、ちよつと何か作るから・・・

女 でも・・・。

勝子 ああ、猫ね。あの猫がだめなのね。ちよつと待って、猫、

女 猫のこと聞きました。

勝子 ・
・
・

久子 死なない化け猫のこと？

女 ・
・
・

勝子 あの子たちが喋ったの？

女 聞きました。私が・・・。

勝子 そう・・・どんなこと。

久子 私、そういえば聞いていなかった。何で亡くなったの？

勝子 前に話したでしょう、女学校時代に大きな手術してね、そのとき輸血で移った肝炎で、具合が悪かったこと。それが、肝硬変から、次の段階に行って、あれよという感じ。まあ、お酒も飲む人

だったけれど。

久子 あんたそういえば何かお酒買ったって言っていたわね。

勝子 ああ、幻の焼酎手に入れたの。あなたお酒飲める？

女 私、ここにいるのが、わからないから、……。

勝子 何で？ わからないの、困るでしょう。

女 困ります。

久子 困ったことだらけよね……でも、しーちゃんは母親の看病はしていたんでしよう。

勝子 それが、病院に行きたがらなかったんですって。あたしが何回かお見舞いに行ったときはかい

がいしく世話していたけれど。

久子 何でまた。

勝子 おばさんもさ、時たま現在に戻ったとき、自分が死んだらどうしろこうしろあれこれ言うらしいの。

久子

現在って。

勝子 もう意識が過去や未来って言うか、言ったり来たり。たまに戻るとそんなことばかり。

久子 それが鬱陶しかったわけだ。

勝子 そう？ おばさんがあんまり死んじやう死んじやうばかり言うから不安になって、認めたくな

かったんじゃないかしら。

久子 だって、事実死んじやう死んじやうじゃない。

勝子 そうだけれど……本当に急になって感じだったのよ。具合が悪いことは久子叔母だって知って

いたでしょう。

女 あ……

勝子 ああ、ごめんなさいね。だから、何か作るから、一緒に食べましょう。

久子 無理に引き留めることないんじゃない。その子だって用事があるんだろうし。
女 はい。

勝子 そう・・・ああ、お友達と連絡が取れたの？　ここの近く？
女・・・いえ、まだです。

勝子 ああ、じゃあいいじゃない、連絡取れるまで。

久子 あんたはいつもそう。よかれと思ったお節介はね、迷惑なことが多いのよ。

勝子 どういうこと。

久子 用事あるんでしょう。

勝子 急ぐの？

女 いえ。

勝子 じゃあ、いいでしょう。

女 でも・・・。

勝子 特別な用事？　誰かと待ち合わせとか？　あの、じゃあこのあたりに宿とってある？

女 いいえ、でも、

勝子 なら、ここに泊まれば。

久子 またあんたは勝手にそんなこと。だから妹たちに勝手に勝子って言われるの。

勝子 おばさんほどじゃないわよ。

久子 そんなこと言って・・・だつてこれからあたし達はお通夜の段取りやらなにやらしなくちゃならないでしょう。その子の相手なんかしていられないし、かえつてその子に迷惑じゃない。

勝子 でも、食事くらいわね。お通夜は明日なんだし・・・いいんじゃない？　いいでしょう。

女・・・はあ。

真美、あい、が入ってくる。

後から京子が入り、猫のところへ行く。

真美 隣の部屋、窓が開かないのよ。ほこり臭くて空気入れ換えようとしたのに。

勝子 コツがあるのよ。

真美 試したわ。冊子の右端をちよつと浮かすようにするんでしよう。

あい あたしもやってみたけれど、だめ。

勝子 あたしやろうか。

真美 こういうのは姉さんじゃなきやだめよね。

勝子 もう・・・（女を見て）ね。

女・・・。

勝子は隣の部屋に行く。

あい 本当に行った。

真美 でしょう。

あい （女に）ねって？

女 すいません・・・食事しましょうって・・・。

久子 食事って言ったって何があるの？ しーちゃん寝ているんだし、さつき厨房のぞいたけれど食
材なんてなかったわよ。

真美 そのことなんだけれど、姉さんがいたらややこしくなるから今のうちに言うけれど、外に食べ
に行かない？

久子 あたし達はいいわ。駅で天ぷらそば食べたから。

京子 あたしは行く。

久子 ・・・そう、でもあなた全部平らげたじゃない。

京子 でも行くの。

久子 そう、勝手にすれば。

あい (女に) ほら、さっき言っていたでしょう。駅前に新しくできたケンチャナヨって言うお店。

韓国料理って書いてあったのよ。

真美 だからって言う訳じゃないけれど、あなたも一緒に行かない？

女 ケンチャナヨですか・・・。

真美 行く？

女 ・・・。

真美 だから、料理についていろいろ聞かせて欲しいし、

あい あそこ以前は狭い焼鳥屋だったわね。一月前に開店したって。京子ちゃんがお店の人に声をかけられたのよね。それでケンチャナヨの意味知っていたのよね。あたし短大で勉強しているんだと思っただ。

久子 しちやいないわよ、何も。一年ももたなかったんだから。

京子 そうね。

間

女 でも・・・

真美 姉さんならいいわよ。それについてもあるのよね。今度うちの百貨店でアジア料理フェア企画

すんの。

女 はあ・・・。

久子 今から駅前に行ったら帰りのバス遅くなるんじゃない。

真美 タクシーで戻ればいいでしょ。(女に) もちろんごちそうする。経費で落とせるし。

久子 独身キャリアアウーマンはお金持ちってわけ。

真美 そういうカビの生えた言い方が若い者と溝作るのよ。(京子に) ねえ。いろいろ飲んで話したい

こともあるからお酒でも飲みながら。

久子 お酒なら勝子が幻の焼酎を買ってきたとか行っていたわよ。

あい あ、それいいわね。

真美 もっとおいしいのあるわよ。ね、ここにいたって食べ物なんか出てきやしないから。

あい 久子おばさんも行かない？

久子 いいわよ、もう外へは出たくない。雨だって降っているし。

真美 じゃ、年長者抜きで。

久子 好きにきなさいよ。あたしは幻でも飲んでいるから。

階下で何かの割れる音。

勝子が現れる。

勝子 何の音。

あい 下ね。

勝子階段を下りる。

真美 しーちゃんが何かしたのよ。

あい 何かって？

真美 知らない。(女に) それより行くでしよう？

女 (しばらく考えていたが、決心して) 連れて行ってください。

真美 よかった。じゃ、支度して。荷物はいいわ。姉さんじゃないけど、そういうことなら面倒見ようじゃない。

久子 似ているよあんだ達。

あい だからいつもぶつかるのよね。近親憎悪ってやつかしら。

真美 なにそれ。

久子 (あいに) あんたの間の悪いのは死んだ父親そっくり。

勝子がゆっくり階段を上がってくる。

勝子 幻のお酒・・・幻になっちゃった。

あい しーちゃん？

勝子 料理しようとしていたらしいの。電気もつけないで。

真美 気の毒だけれど、あわないのよね、あの子と。必ず何かしかすのよ。同情する気持ちを持ち越えちゃうのよ、気の毒さが。そうして気の毒がっていた自分が馬鹿に見えるのよね。

勝子 そんな言い方しなくてもいいでしょう。
真美 だって、

しーちゃんが現れる。

しーちゃん (女に) アラン、大丈夫ですか。

女 え、ああ。

しーちゃん どうも。

しーちゃんはアランをのぞき込みしばらくトントンする。

しーちゃん 大丈夫ね、アラン・・・。

久子 幻に吞まれちゃったのね。

しーちゃん 食事の用意しますね。

真美 いいわよ、あたし達食べに行くから。

しーちゃん でも、さつき電話で母から言われてますから。

勝子・・・さつきの電話って？

間

京子 (勝子に) あたし来たとき、しーちゃん電話してた。

勝子 誰と？

京子 さあ・・・。うん、わかりましたって言って切るところだったから。

勝子 だめよ、しーちゃんに電話出させちゃ・・・忙しいんだから。

京子 だって、電話に出ていたんだもの。

女 あ、私、居るときに電話かかってきました。

久子 何か、来るのかしらね・・・違う次元から。

あい あっちの世界のこと。

真美 あるわけないでしょう。

女 あの、猫は魔女の使いだから。

あい 魔女って雰囲気じゃないと思うけど。

久子 いくら変わっていても何か、そういつたところから連絡のはいる子じゃなかったじゃない。

真美 連絡って？

久子 だから、誰かからの電話をそう思いこんで居るだけでしょう。

あい しーちゃんのお母さんから？ 違う？

間

しーちゃん ええ、母から、皆さんをきちんとおもてなしするようになって。だって、今日はおばさんの思い出を語り合うために集まったんでしよう。おばさんが亡くなってもう二年ですか・・・いつもは皆さん、夏にいらっしやるのに・・・また真美さんの都合が合わなかったんですか。こんな、何もない時期に、わざわざ来ていただいてありがとうございます。せっかく集まったんだから、私にお構いなく思い出を語り合ってください。さあ、どうぞ。

真美 どうぞっていわれてもね。

勝子 そうね、そうしましょう。(真美に) 特にあなたはそうすべきよ。

真美 ちよつとどういこと、姉さん。

勝子 ちよつとぐらい付き合いなさいよ。

真美 駄目。私たち駅前まで外食することにしたから。

勝子 私たちって？

真美 久子叔母以外。

勝子 (女に) あなたは。

あい 一緒に付いてきてもらうの。韓国料理屋だから。

女 (勝子に) すいません。

しーちゃん いえ、私が作りますから。

しーちゃんはアランの箱を持って立ち上がり、女のところへ行く。
皆、女から少し距離を置く。

しーちゃん じゃあ、また、アランを見ていてくださいね。

女 あの、もう嫌です。

しーちゃん なんで？

女 わたし、関係ない。

しーちゃん 関係ないって、お願いしているんじゃないか。

女 ≪何で押しつけるの？ 私には関係ない。猫はあんた達の問題でしょう！≫

勝子 あなた、そんなに興奮するとまた息ができなくなるわよ。

あい 息って？

勝子 バス停の時もそれで……。

あい (女を制して) 大丈夫？ ごめんね、あの、しーちゃん、彼女ちよつとあたし達と出かけるの、食事に。だから……勝子姉さんは残るから。

しーちゃん 作るって言っているじゃありませんか。皆さん待っていてください。どこへも行かない
てください。

真美 (勝子に) だって、何もないんでしょう。その、明日の相談するにしても何か食べてからじゃ
ないと。

久子 あなた、おなかが減るとすぐ苛つく癖、いい加減治した方がいいわよ。

真美 行くから、姉さん。

勝子 ・ ・ ・ わかった。

真美 やけにあっさりね。

勝子 わかったって言っているじゃない。あたしは何言ったってそうするんでしょう。

真美 (しーちゃんに) じゃあ、ほら、ちよつと出かけるわ。

しーちゃん どこへ？ どこへも行かないで。作りますから。

真美 だから、海よ。食事ができるまで海でも眺めることにする。ほら、いつもここへ来たらあたし
達、海辺を散歩していたでしょう。海の向こうの岩だらけの小さな島まで泳いだりして、

あい 雨よ。

真美 雨でも、泳ぐの。

女 泳げません。

真美 (怒鳴る) だから、食事ができるまで出かけるって行っているの！

間

しーちゃん ・ ・ ・ わかりました。

しーちゃんは動かない。

勝子 (しーちゃんに) アランは私が見ておくから。ね、しーちゃん、食事のことはそんなに気にしないで。あたしが何とかするから。あなた、少し疲れているのよ、アランの看病で疲れているのよ。少し休んだら？ ね、アランはここでみんなで見えておくから。

勝子はしーちゃんからアランを受け取り、部屋の片隅に置く。

勝子 寒くないようにね。ちゃんと見ておくから。

勝子は皆を見て、しーちゃんの肩を支えて階下に降りる。

久子 ちよつとみんなしーちゃんに対して冷たくない？

真美 どういうこと。

久子 いい、しーちゃんは、その猫を本物だと思いこんでいるんだから。

あい わかっているわよ。

勝子 だから、もっと、親身になって、なんて言うのかな・・・やさしく包み込むように。いわば、彼女の母親の分身なわけなんだから。

真美 猫を本物だと思えってこと？

久子 そう。この民宿で夏のためにはただ同然で泊めてもらっていたでしよ。

あい 子供の時の夏休みくらいね。姉さんが高校に入る頃にはご無沙汰していたわけだし、あたし、民宿のおばさんって言ったって、あまり顔も思い出せないんだもの。

久子 そりやそうだけれど、あんた達にとつちや母親との思いで深い場所なわけなんだから。この民宿だつて、無くなるわけだし。今年で閉めるつてことだったんだらう、どのみち……。だから、勝子にとつちやせめて家族の思い出つてやつをあんた達と、

真美 感傷に浸りましようつてこと？ 家族なんて一度別の暮らし始めたら離れたつきあいしている方がいいのよ。

久子 そんなこと言つて、いろいろ思い出して語り合うつてのも悪いことじゃないでしょう。
京子 思い出したくないこともあるんじゃない。

間

あい でも、しーちゃんにはきちんとわからせた方がいいんじゃない。やつぱり。

久子 まあ、あたしもそう思うんだけどね。勝子がお葬式までつて言うし。

あい それが終わつたらどうする気なの。あの子病院？

久子 だから、それを話し合うんじゃないの。

女 (腕時計を見て) ああ……。。

真美 ……行きましようか。

勝子が上がってくる。

真美 ちよつと行つてきます。

あい しーちゃんは？

勝子 お米研いでいる……。あんた達が海へ行くならお弁当におにぎりだつて。

真美　そう。
勝子　遅くならないでよ。

京子、階下に降りる。
続いて真美とあい。女は簡単なバックを手に勝子に会釈をして階下に消える。

間　二人は所在なげに座卓に向かい合う。

久子　こどもの時から変わらないものなんだね。あんた達とここへ遊びに来るたびに真美とあいはあんなと敵対して別行動。しーちゃんはそのけ者。

勝子　おばさんだつて、京子ちゃんと別行動でしょ。

久子　そう・・・あの子とね、ずいぶん口きいていないの。

勝子　どうして？

久子　短大に入ってからでもピアノを続けていたんだけど、突然やめるつて言い出して。

勝子　期待しすぎたんじゃないの。

久子　少しはいけると思っただけだね。

勝子　短大も？

久子　真美から少し借りているしね。本当ならもつと怒るべきだったんだろうけれど

勝子　・・・。

久子　もう、何も言っちゃいけないんだなって・・・あの子ももう私から離れるんだなって思ったらそう思ったら、憑き物が落ちたみたいだね・・・自分でも不思議なくらいどうでもよくなった。

勝子 そういうもんじゃない。あたし子供いないからわからないけれど、子供だった時のこと考えたらね。

久子 でも、あんたずっと一緒だったでしょ、母親と。

勝子 あたしはピアノ無かったから。

久子 . . .

勝子 きっかけ、あったのかな . . . 思い出せない。

久子 . . . いい気晴らしになると思ってたね . . . あんたから連絡受けて、あたしは行くけれどおまえはどうする？ って聞いたなら、返事なしよ。それでも、荷物まとめてついてきたけれどね。ひよっとして途中でふっといなくなったらどうしようって思った。それならそれで楽かなとも思ったけれど . . . 。

勝子 おばさん . . . 。

間

勝子 (外を見て) あの子達 . . .

久子 それなりに悲しんでいると思うよ。どんどん自分の周りから自分の昔が消えていくって言うのが嫌になって、それでもいちいち感傷に浸ることもできないから、それまでは素っ気なくするものなんだ。あんただってそうでしょう。

勝子 あたしは . . . 。

久子 それより、韓国の子、大丈夫？ おかしなことに巻き込んで . . . 。

勝子 うーん . . . 。

久子 まあ、いいんじゃない。

ボタンと隣の部屋で大きな音がする。

久子 何？ 風？

勝子 ・ ・ ・ やっぱりだめか。

久子 何？

勝子 窓、あいたきり閉まらないの。

久子 え？

勝子 ダンボールで塞いだけれど・ ・ ・ 。

風強くなる。

しばらくして、風音に混じって階下から ゴンゴンと何かをぶつける音がする。

久子 何の音？

勝子 しーちゃんかしら。

風が舎人の部屋を吹き荒れる音に混じり、何かをぶつける音が続く。
二人、部屋を出る。

転

女が携帯で話をしている姿が浮かぶ。

少し離れたところに京子がいる。
隣の部屋から風の音に混じり幽かにテレビの音が聞こえる。

女 　《そうよ。全部嘘、お母さんをだましていたの・・・言っちゃりたかったの、あたしとお母さんがどんなに苦労したか。お金もなくて、お母さんが仕事を探すたびに私はおばあさんのところに預けられていたわね、そんなことや・・・いろいろよ・・・そう、そのためよ・・・ええ、会った・・・だって言えないじゃないお母さんには・・・止めるに決まっているでしょう・・・今更よ、わかっているけれど・・・うん・・・だから・・・あたしはバカよ・・・そう・・・うん・・・元気だった。お店、ケンチャナヨって言うの・・・そうよ、バカみたいな名前でしょう・・・言っていない、何も・・・ただ見ていただけ・・・見ていたかっただけ・・・そつと・・・もう関係ないことをわかったかっただけなの・・・明日・・・帰る・・・もう会わないから・・・うん・・・うん・・・もう会わない・・・お休みなさい。(女はゆっくりと電話を切る)

京子 　(缶ビールを飲んで) ねえ、お母さんって〇〇って言うのよね。
女 　・・・ええ。

京子 　お父さんは？

女 　・・・〇〇。

京子 　〇〇って？

女 　バカ。

京子 　《おとうさん、バカ？》

女 　《私がバカ》

京子 　全然ケンチャナヨじゃなかったわね。

女 　(笑って) 母も言っていました。

京子 ……○○、似ていたわね。鼻のところとか。

女 鼻？

京子 そう。

女 似ていた？

京子 ええ。

女 ほかには？

京子 ……。

女 わかりますか？ あの人も。

京子 え？

女 私のこと、似ているって…。

京子 さあ…ずっとあなたのこと見ていた…わかるに決まっているでしょう。あなたわかって欲しかったんでしょう。国の言葉で話していたじゃない。出身地、○○って。

女 ……。

京子 わからせるようにして、後知らん顔していたわね。

女 いけませんか。

京子 いくらあたし達だって、なんかあるなってわかるわよ。

女 そう、どんな顔するか見たかった。

京子 ……何歳の時？ いなくなっちゃったの。

女 十六年前。出稼ぎに行ったきり。最近、日本に働きに来た友達に教えてもらいました。○○出身の人が店で働いているって。

京子 どんな感じ？ そういうのって。

女 感じ？

京子 そんな《父親》と会うって。

女・・・その・・・猫みたい。

京子 猫。

女 死なない猫みたい。忘れかけてもいつも生きている。

京子 《母親》みたい、私の。

女・・・。

京子 あたしき、ここじゃないところ行きたいんだ。

女 どこへ。

京子 あたしのことを誰も知らないところ。そこであたしは何でもできるような気がする。

女 何もできない。

京子 なんで？

女 ここじゃないところ、どこにもないでしょう。子供みたい。

京子 でも、あなただってそう思っていたんじゃないの。ひよつとしてこっちで暮らそうって思って

いたんじゃない？

女 (笑って) 少し考えた。

京子 ほら。

女 だけど駄目。私は見ることしかできなかつた。何も言えなかつた。恨み言すら言えなかつた。

勇氣無いもの。どこへ行っても同じよ。

京子 それを言うために来たの？

女 それを言うためだと自分に言い聞かせた。

京子 教えて欲しいな、あんたが、あんたを捨てた父親になんて言おうとしたのか。だってあなたちってそういう恨み言ってなんか大きな斧振り回すみたいに言うんでしょう。

女・・・わからない。

京子 あたしの言っていることが？

女 全然違う人だったから・・・もう思い出じやなかったから。

京子 どんな人だった？

女 道楽者？ 頑固な獣みたい。お酒のおいさをぶんぶんさせて、一度、血だらけで帰ってきて、青い顔してげんこつで母さんとあたし、ぶたれた。

京子・・・横で働いていたいつも笑っていた女の人と暮らしてんのかしら。

女・・・。

京子 興味あるな。

女 そうでしょう、たぶん・・・。

京子 ねえ、会う前はこういってやろうとか考えていたんでしょう。それを聞かせてよ。

女 もういい・・・明日帰るから。

京子 でも。

女 (怒って) なぜ、聞きたいの？

京子 参考にするの。

女・・・。

女 《母に謝らせない》

京子 何？

女 忘れた。

京子・・・お金とか出させたりできないの？

女 (話題を変えて) ここじゃないところって、どういうところ？

京子 どこかよ。

京子、猫をのぞき込む。

京子 ピアノ。ずっと習っていたの。《父親》死ぬ前から習っていたから、《母》にとっちゃピアノのやらせることが形見みたいに思っていたのね・・・バカみたい、親って子供がピアノやっていたらピアノになると思いきや、そんなことあるわけ無いじゃない。だから、思い切った、やめるって言ったの。言ったとたん、《母》は憑き物が落ちたみたいになって・・・何も話さなくなつた。短大だつて行きたくもなかったし、ついでだと思つてやめますって言った。そしたらじつとあたしを見て、そう・・・っていったきり・・・まるでアランみたい。

京子、アランをすこし突いてみる。

京子 ほら、何も言わない。

女 どこかへ行く時、お母さんを置いていくの。

京子 そう。

女 何で？

京子 そうしなけりゃ、私が可哀想だから。

女・・・。

京子 いつも考えていた。きつと、こうすれば何か起こる。何かささやかな、それでいて大きなこと。いつもそんなふうに通じていた。けど、何を言っても何も起こりはしないのね。

女 何？

京子 わからないけれど・・・

久子が顔をのぞかせる。

久子 京子、おいで。

京子 どこへ。

久子 布団を敷いてあるから。あたしが寝ていたから暖かいよ。

京子 いつもぬるくて暖かいのね。

久子 何？（気持ちを変えて女に）こっちで寝なさい。窓はガムテープでふさいであるし、猫はあたし達で見るから。

女 はあ・・・（京子を見る）

久子 この部屋、しーちゃんが出入り入ったりするでしょう。あたし、ちよつと休ませてもらったから。猫はあたしらで見るといいの。

京子 あたしは冷たい布団がいいの。冷たい布団に潜り込んで、体がさーつと冷えて、それから自分の体温でゆつくり暖かくなるのを感じるのが好きなの。おばあちゃんならよかったけれど。

久子 そう・・・でも。

女は立ち上がり、隣の部屋へ向かう。

久子 （女に）あなた、大丈夫？

女 え？

久子 ええ、あの子達に聞いたから・・・その・・・。

女 はい。

久子
そう。

女は去る。

続いて京子が女の後を追う。

久子は京子を目で追い、やがて猫の前に座る。

入れ違いに真美とあいが隣の部屋から入ってくる。

真美 勝子姉さんはまだ？

久子 ああ、そうみたいね。

あい しーちゃん、どうなるのかしら。

真美 さあ・・・それよりきちんと姉さんに言うのよ、あなたからも。

あい わかったわよ。

久子 家のこと？

真美 そう。

久子 布団の中で聞いていたよ、ぼんやりと。最初はあんた達がお通夜の相談をしているのかと思つた。あたしは目が覚めていて、起きようと思つたけれど体が動かなくて・・・おまえ達の話を聞いているうちにまるで、その話があたしのお通夜であたしの枕元で話しているように思えてきてね・・・嫌な気分だった。

真美 何だよ。勝子姉さんの住んでいる家はあたし達にも権利のあるものでしょう。その話をして何が悪いのよ。

久子 話はいいいけれど、だって、あたしの時も周りでこんな話をされるんだなって思うとね・・・
真美 何？

久子 あたしの時はどんな思いで話してくれるんだろうね。

真美 何なら今してみましようか。

久子 いい。遠慮します。ごめんなさい。

真美 話したくても何も無いわよ。お婆さんなんて残すもの無いじゃない。借金以外は。

久子 悲しんだっていいでしょう。すこしは。世話になった人が亡くなっただから。

真美 叔母さんには京子ちゃんがいるでしょう。

あい けんかしているのよね。

久子 しているならいいけれど、どうなんだか。

真美 そりゃ、それなりの思い入れもあるけど、こんな時でもないとき集まらないんだから。

久子 姉さんが言っていたよ、あんたは冷たいところがあるって。

真美 勝手に決めつけないでよ。

あい あたしは？ お母さんなんて言っていた？

久子 もういいじでしよ。

あい 何でよ。

久子 (猫をのぞき込んで) この猫もほんと、死ぬに死ぬやしないわね。

真美 やめてよ、猫に触るの。

あい ヌイグルミよ。

真美 なんでも、気味が悪いでしょう。第一シーちゃん、下で寝ているんだから下に持って行けばいいじゃない。

久子 アランはこの部屋がお気に入りなんだって。

勝子が現れる。

勝子 しーちゃん、やっと寝たわ。
真美 ご苦労様・・・まるで母親ね、添い寝までして。
勝子 あんた達が帰って来るまでずっと壁に頭をぶつけていたのよ。ゴンゴンって。
あい 何で？
勝子 心臓の音ですって。心臓の音を絶やさないと。
久子 けがは大丈夫・
勝子 血がすこし出ていたわ。絆創膏ですむ程度。
久子 そう。
勝子 あの子、お父さんに会いに来たんだって？ 京子ちゃんから少し聞いたけれど。
あい まあね。おかげで気まづくなってるね、料理もそこそこで帰って来ちゃった。
勝子 そうだったんだ。
あい 料理もそんなにおいしくなかったね。
真美 何も食べないよりましよ。
勝子 少しは役に立ったの？ 百貨店の企画に。
真美 別に・・・。
勝子 (あいに) あんた子供の時から辛いのが苦手だったものね。
あい 少しは食べられるようになったのよ。旦那が好きだから。
久子 旦那が好きね・・・男運は全部あんたに行っただね。
あい 辛いものが好きなのよ、うちの旦那。
真美 姉さん。
勝子 (ぼんやりしていた) え、

真美 お通夜の段取りもあるでしょうけれど、話したいことがあるの。

久子 ほら来た。

真美 何よ・・・。

勝子 家のこと？

真美 そう。なんだか話が早そうね。

勝子 お通夜が終わってからね。だって、身内の葬式であれこれじゃないのよ。しーちゃんのお母さんじゃない。死んだ人に失礼だわ。

久子 そう思うよ。

真美 叔母さんは黙っていてよ。

勝子 明日の晩、公民館で7時から。観光協会の方が互助会通じて段取りしてくれるんだけど、受

付とか、お香典とか、あたし達で、

真美 だから、その話は後で、

勝子 今するの。嫌な話は後回し。

真美 先にするべきよ。それに嫌な話じゃないわ。当たり前の話じゃない。それともあたし達猫の番しにやってきたの？（あいに）ほら。

あい 勝子姉さん、だから、

勝子 お風呂、沸かそうか。

あい ああ・・・え、何よ突然。

勝子 突然思いついたの。三人で入ろうか。

真美 ・・・・何の作戦。（あいに）丸め込まれちゃ駄目よ。

勝子 何もないわよ。突然思いついただけ。よく三人で入ったでしょう。小さい時、こんな風に三人で待っていたことあったわね。あの時は夏だったけれど、台風で風が今日みたいに強くて・・・。

覚えていない？

あい そう？

勝子 確か、お父さんがまだ生きているとき。(あいに) あんた、小学校二年くらいの時よ、覚えている？

あい うん、何となく。

勝子 お父さんとお母さんが買い物に行ったときのこと。あたし達三人で留守番だった。あのとき、

もしお父さんもお母さんもそのまま帰ってこなかったらどうするかって話したこと覚えていない？

真美 そんなこと、何で？ 何で話すの？

あい ああ・・・まだ、みんなが仲良かったときのこと。

真美 あんたは何でそういうこと平気で言えるんだろ。もう、勝手にすれば。私だってこんな話、嫌

よ。でも誰かが言い出さなければいけないことでしょう。

勝子 (かまわず) グスコープドリみたいにそのうち人さらいが来て、みんなバラバラにさらわれたらどうしようって・・・そしたらあいは、確か・・・あたしが一番若いから、姉さんの面倒をみるわって言ったのよ。もしはぐれても、うんと勉強して偉くなって必ず探し出すから・・・そしてみんなで暮らしましょうって。

あい けなげね、あたし。

真美 言っておきますけれど、それあたし。(あいに) あんたは、途中から泣き通しだった。

勝子 そうだった？ それから、あいが、寂しいからみんなでお風呂に入りましょうって、まるであたし達の保護者みたいに振る舞って、着替えはここよ、とか何とか世話焼きだして、

真美 言いたくないけれど、それもあたし。あいが手がつけれないくらい泣き出してお漏らしした

からお風呂に入れたんじゃない。

あい 何となく覚えている。

勝子 あ、そう。

真美 中間に介在する運命かしらね、あたし。

久子 しーちゃんは登場しないの？

真美 お風呂は召使いに沸かしてもらったつけ。

久子 可哀想に。

あい どうしたって召使いの役だったわよね。

久子 残酷だね。

あい 京子ちゃんなんかもつとひどかったのよ。

久子 あんた達の影響だよ。

勝子 あー、もう・・・何とか取り戻してみたかったのよ。あたし達が姉妹だったこと。三人で寄り

添って、何か考えるってこと。

あい お風呂で？

真美 お母さんのいつもの手じゃない。何か言い聞かせるときお風呂場で裸だから逃げ場なくして

懇々と説教したわよね。

勝子 そんなつもりじゃないんだけど。

真美 どんなつもり？ そんなこととしてどうなるの？ うちに帰ればすぐ忘れるわ。すぐに仕事に追

われて、そんなことがあったことなんか記憶の片隅で溶けていくのよ。

勝子 笑い合ったこともあったでしょう。

真美 何を言わせたいの、姉さん。だって、お母さん急に頭が痛いって言い出して、右手がだらんと

なつて、病院であれよという間だったんでしょ。

勝子 お葬式に行けなかったこと、負い目だなんて思っていないわ。新しい百貨店の開店日だったん

でしょう。そんなことはわかっています。あんた達の考えていることもわかっています。でもね、

もう少しいいんじゃない？ この民宿もなくなるんだし、あたし達がいたってことがどんどんなくなっていくのが嫌なのよ。

真美 あんな古い家、マンションにすればいいのよ。そういう話があるのに。いつまでも学習塾じゃないでしょう。子供だって年々減っているって言うんだから。しかも住んでいるのは今は姉さん一人じゃない。二年待ったのよ。いくら何でもそろそろでしょう。

あい もういいよ。

真美 いい、勝子ねえの言うことに丸め込まれちゃだめよ。のほほんと脳天気のふりしてしたたかなんだから。母さんの看病をしたからって・・・そりや感謝もしているけれど、そんなのはね、私やあいだって、勝子ねえの状況だったらやってるわよ。そんなの当たり前じゃない。そうでしょ。ねえ！

あい もういいでしょう。

真美 あんたは大好きな旦那がいるし、気楽だろうけれど、あたし達は独り者だからね。老後って考えなくちゃいけないの。

久子 うわー、あたしどうすりゃいいんだろ。

真美 そうならないように考えてるの。

あい 何よ・・・いつもいがみ合って・・・。

真美 マンション建てればあんただって少しは楽になるのよ。

勝子 反対している訳じゃないの。

真美 うちの関係の不動産で話進めてきたんだから。今のうちじゃなきやよけいなお金がかかるのよ。

あい やめて！

真美 黙りなさい！

あい 何よ・・・私だってやっと落ち着けたのよ。結婚して。わたし、いつも姉さんたちのいがみ合

いにおろおろして・・・どうすればいいかずつと悩んでいたわ。いつもひとりぼっちで・・・だから・・・誰かに守って欲しくて・・・そのために早く、早く結婚しようって・・・それがいけないの。真美ねえみために独身の人にはわからないでしょうよ。家庭ってものが・・・落ち込んだときに、無条件でそばにいて売れる家族がいるって言うことが、わかるわけじゃないでしょうよ。

真美・・・何言ってるのよ、あんたそういうえば小さいときから自分をシンデレラに置き換えていたものね。意地悪な姉達にいびられて、

あい　うるさいのよ、姉さん！　あたしにだって意見あるんだから。

真美　言ってみなさいよ！

あい　・・・。

真美　シンデレラなんて他力本願で何の努力もしていないのよ。こっちは踵ややつま先切り落として靴にはめ込むような努力しているんだから！

京子が現れる。

京子　寝られしない。

間　先ほどから風が強くなってきたようだ。

女が続いて現れる。

女　あの・・・窓・・・。

ボタンと音がする。

隣の部屋で窓から風が吹き込んでいるようだ。

勝子が、隣の部屋に去る。

久子 (真美に) まだ食べたりのないの？ 満腹にならないうちは話しちゃ駄目よ。

真美 なによ、老後の人。

京子 あたし、(女を見て) この人と散歩でもするから。

久子 何時だと思っているの？

京子 バス停のところのホテルならお店あいているでしょう。ここにいたってうるさいばかりだし。

勝子 (声) ちょっと、ガムテープ持ってきて！

あいが、立ち上がり隣の部屋に行こうとする

すると、しーちゃんがナイフを手に、行く手をふさぐ。

しーちゃん (静かに) 皆さん、外に出ないで！ ここでじっとしててください。アランを守って…。

勝子 (声) ちょっと、何しているのよ！

勝子姿を現す。

勝子 (しーちゃんを見て) しーちゃん…。

しーちゃん とても危ないですから、勝子さんも中に入ってください。

勝子、部屋の中に入る。
京子と女も続く。

真美 まさか、そういう人じゃないでしょう。

久子 何？

真美 危害を加えるような・・・。

久子 あんたに復習しようとしているんじゃない。

真美 やめてよ。

しーちゃん 大丈夫、皆さんは私が守りますから。

勝子 しーちゃん、守るって、何から？

しーちゃん 聞こえるでしょう。風の音に混ざって、何か、よくないものの声・・・。

真美 声なんか聞こえやしなでしよう。

しーちゃん わからないんですか。

真美 わかるわけじゃない。

勝子 しーちゃん、どうしたの？ ねえ、落ち着いて。

しーちゃん 落ち着いてます。落ち着いて行動します。お客様の安全を第一に考えています。

久子 なによ、火事でも起きてるの？

しーちゃん 何か良くない物が覗いているの。ね、みんな隠れて！

しーちゃん みんなを部屋の奥へ行くようにナイフで促す。

しーちゃん ね、ここで守りますから。ほら、風の音が強いでしょう！ あの音にのって、誰かが覗

くのよ（女に）アランを見守っていて下さいね。しつかりと。

女 だって、猫、その猫、

勝子 （女を制して）あ、いいわよ、わかった。守ってるわ。

あい どういうこと？

勝子 いいから・・・ね。

しーちゃん きつとそいつはアランを連れて行こうとしているのよ。アランと一緒にお母さんも連れて行こうとしているの！ ね、そんなのさせないわ。ね、おかあさんが連れて行かれたら嫌でしょう。ねえ、そうでしょう。お母さんが居なくなったら私が無くなっちゃうじゃない（少し泣き出す）

京子 馬鹿みたい。あんたはあんたじゃない。

あい そんなこと言っちゃだめよ、今。

京子 言いたいときに言わなくてどうするの。

あい 静かにしなさい。

間 しーちゃんは泣いているようだ。

久子 あんたたち・・・こんな風に母親のこと思って泣いた？

あい 何言い出すのよ。

京子 泣かない。

久子 ・・・何、あんた。何か言いたいなら言えればいいじゃない。いつもふくれっ面して・・・

真美 別に泣かなくなっただっていいじゃない。

久子 何よあんた。

真美 何故？ 泣いたらいいの？ 姉さん。

勝子　・・・。

真美　泣かなかつたらどうだって言うの？　泣かなかつたあたしには罰でも当たるって言うの？　何

よ、(あい)にあんたなんか電話の向こうでザンザン泣きわめいて、お葬式にいけないあたしを人非人みたいになじりだして、なんだかあたし、白けちゃった。出かかった涙も乾いたわ。そうしたら、無理してお葬式に出る気も失せて、どうせ行つたつて

しーちゃん　(突然)泣いてなんかいない！　うるさいのよ！

隣の風音が強くなる。

しーちゃん　何？

勝子　ああ、隣の部屋、窓が開け放しで、

しーちゃん　そこから入ってくる気だわ。

あい　二階よ。

しーちゃん　どこからでも入って来るの。さっきだって、あたしが何か作ろうと思つたら台所の窓から何か覗いていたわ。でも窓には格子があつて入り込めなかつたものだから、

あい　まさか、

しーちゃん　(女に)ねえ、アランを見ていて下さいね。もし、あたしの隙について悪魔がアランを連れて行きそうになったら、抱きしめて引きもどして下さいね。

女　(首を振る)《いやー！いやー！

なぜ、何故わかつてくれないんですか。頼んでいるのに！

女　《関係ない！　何故私に猫を押しつけるの！　何もあんたに悪いことしていませんよ。》

久子　あんた、そんなに嫌がらずに、少しは言うこと聞いてやったらどう？　あんた猫係にされてい

るんだから。

京子は久子から女をかばう。

京子 嫌だつて言っているじゃない！ いつも勝手に押しつけるのよ、あなた。そんな、無責任な軽い言い方で。自分が何言ってるかわかっているの！

久子 何が、気に入らないの！

京子 全部よ！ 何もかも！

久子 何もかもって何よ！

京子 まるで、アラン・・・死なない化け猫はあんたよ。

久子 何よ！

京子 わからないの？ 子供みたいにあたしのものを何でもほしがって、勝手にわめいて・・・何でもなめる猫みたい。お母さんわかりました。私は今すぐ全部が欲しい。私の時間の全部、お母さん抜き時間。今すぐ、さもなくばいらぬ。何にも・・・。

しーちゃん 何よ、早くアランを守って！

女 《嫌！》

京子 《嫌》私がここへ付いてきたのは、《嫌》って言うためよ・・・

久子 ・・・。

しーちゃん 早く！

勝子 わかったわ、しーちゃん、ね、私が見ておくから。

しーちゃん 勝子さんじゃ駄目なの。勝子さん、だって、アランをとつちやうかもしれないでしょう。

勝子 え？

しーちゃん 私知っているの。勝子さん、あたしのお母さん取ったでしょう。お母さん、病室で勝子さんのことを静子って呼んでいたもの。

勝子 あれは、おばさんが薬のせいだとしていたから、私をうちの母だと思いこんだり、あなただと思いこんだり・・・

しーちゃん 歌とか一緒に歌っていたじゃない。あたしが、病室にいなかった時、歌っていたじゃない。それから・・・(何か思い起こしている)

真美 原因は姉さんじゃないの。だから親身になっていたのね。

勝子 そんな・・・。

風が吹く。

しーちゃんは等々女にナイフを振りかざす。

しーちゃん (女に) 早くって言うているでしょう。

女は息が苦しくなる

女 (あえぎながら) ≪私は何もしていないでしょう。そんなもの押しつけないで！ 勝手なことばかりしないで！ 嫌なんです！ こうして、何か、押しつけられることが。関わってしまったことは仕方ないでしょうけれど！ もう関わらないで！ ≫

女は過呼吸でうづくまる。勝子と真美、あいが介抱する。

しーちゃん ほら、悪魔が来たのよ。その子にとりついて、アランを連れて行こうとしているんだわ。

外から、風音に混じり、男の音がする。
何かを呼びかけているようだ。

しーちゃん ほら、あの声・・・まるで悪魔の声・・・アランをさらに来たのよ。連れて行くんだ。
お母さんは、アランをかわいがっていた。だからお母さんと一緒にアランも連れて行くんだ。連れて行かないですよ。あたし何でもします。朝起きたらきちんと庭掃除もします。それから早起きして市場にも行きます。体がだるいからなんて言ってお母さんに行かせたりしません。
勝子 しーちゃん、違うわよ、この子の、

女、苦しい息で、出口に向かおうとする。

しーちゃん 動かないで。アランを守って！

真美 よしなさい！

しーちゃん みんな動かないで！

女 《どいて！ どこかへ行つて！ みんな、あたしに関わらないで！》
しーちゃん 悪魔が乗り移っているのよ！

しーちゃんは、女にナイフで斬りつける。

周りの人々が押さえつける。

しーちゃん、押さえつけられてうづくまる。

やがて体力を失ったように、動かない。

女は、息を整えたようだ。

あいと真美があたりを片付ける。

勝子 (女に) 行かなくていいの？

女 《大丈夫》

勝子 ・ ・ ・ そう。

あい 一体どうということよ ・ ・ ・ 。 何よ、滅茶苦茶じゃない。

間

久子 (京子に) 滅茶苦茶なことばかり言うよ、お前。

京子 ・ ・ ・ 。

久子 勝手なことばかり言って ・ ・ ・ だから何だい！ お決まりの言葉だろうが何だろうが言わせて

もらうよ。あんたは私が育てたんだ。紛れもなく。あんたはどうしようもなく私の子供で私はずつとお母さんなんだよ。《嫌よ》がなんだい。まっぴらだよ、そんなわからない言葉であたし達親子が

引き離されるものか！ (猫に近づく) この猫があたし？ まさか ・ ・ ・ ぬいぐるみじゃない。こ

んなのとあたしを一緒にするなんて ・ ・ ・ 。 (猫の布を取る) うわー ・ ・ ・ 汚れて、ボロボロ ・ ・ ・ 。

あんたが昔 風呂にまで連れていた犬のぬいぐるみ、なんて名前だっけ ・ ・ ・ 。

京子 あんたよ。

久子 どういうこと？ 犬の名前を聞いているの。あんたが犬のぬいぐるみ欲しくてたまらなくて、ヌイグルミ抱きかかえて店の前で駄々こねてひっくり返って泣きわめいていたじゃない。そして買

ってあげたのよ、何でも言うこと聞きますからって言うから、
京子 もう忘れた。憶えていても忘れてやる

久子 何で、

京子 じゃあ、あたし、しーちゃんになれって言うの？

久子 ヌイグルミよ！ これはただのヌイグルミじゃない！

久子はアランをつかんで放り投げる。

勝子 叔母さん！

あい やめてよ、みんな、もうお願いだからやめてよ！

しーちゃんがゆっくりとアランを拾い、抱きかかえる。

しーちゃん 悪魔が連れていったんだ。あの声の・・・

久子 違う。あの声は、あの人の父親で、あなたの母親は死んじゃっているの。そのアランは、ぬいぐるみでしょ。わかってるんでしょう。ねえ、本当はわかってるんでしょう。わかっていてやっ
っているんでしょう。

京子 よしなさいよ。わかっていたってわかりたくないこともあるんだから。

しーちゃん じゃあ、もうアランはアランじゃないの？ アランじゃないのね。そんなこと無いわ、
ホラ、だって心臓の音がするでしょう。

しーちゃんは、部屋の壁に向かい、頭を静かに打つ。

真美 よしなさい！

しーちゃん だって、アランが死なないままここにいたら、私はどうなるの？ ずっとアランを見て
いなくちゃいけないでしよう。なら、私はどうなるの？ 私がなくなっちゃうじゃない！

真美 （勝子に）姉さん。

勝子 …… 民宿のオバサンの病室で、話している時、おばさん、あたしのことを、いろんな人に思
いこんで、私を女学校時代のお母さんだと思いこんだりして……話なんか合わないじゃない。だ
から、私も、オバサンをお母さんだと思うようにして話していたのよ。ろくに話もできずに死んじ
やつたでしよう、だから……お母さん、私も年なのよ。もうくたくたなんだから。お母さんが思
っている以上にね。私だって……どうなるかわからないのよ。

真美 何言っているのよ。何だって言うのよ、もう！

しーちゃん 見てよ、見てよ……私は小さい。可哀想だわ。動かなくて、冷たくて、こんなになっ
て……でも、まだ心臓の音が聞こえる。トントントンって……この心臓の音が消えるまで私、
待つ。猫の心臓の音って、速いのね、砂時計みたいにさらさら……
あい やめてよ、みんな……お願いだから……。

皆、ぐったりとしーちゃんを見ている。

風が、大きく木々を揺らす。

さらさらと、葉ずれの音にあたりは包まれる。

女の携帯が鳴り、女が話し出す。

女 ≪そうよ、お父さんに会って見たかった……会わなかった……それでいい？ いろいろなこ

と言いたかった。どんなに苦勞したか・・・でも、違ふの・・・ただ、呼び合いたかったんだと思
う・・・お父さん、お母さん、お父さん、お母さん、お父さん、お母さん、お父さん、お母さん・・・
私・・・うん・・・≪大丈夫・・・大丈夫・・・≫うん大丈夫≪大丈夫・・・≫。

木々を揺らす風の音が民宿を覆い尽くし、最早何も見えなくなつた。

転

朝。

京子が一人佇む部屋に真美とあいが入ってくる。
喪服をハンガーに掛け、壁につるす。

久子 (憂鬱そうに) いい天気ね、うきうきするわ。

勝子 (現れて) お通夜なのに。

久子 どんな日だって、いい天気なんだから。誰にとつても。

久子 はも手にした喪服をハンガーに掛け、部屋の隅につるす。
勝子は、二着の喪服を同様に。

京子 どうしてそんな服を着るの？

勝子 お通夜だから。

京子 しーちゃんは着たくないんでしょう。

真美 着なくちゃいけないから。

京子 どうしてそんな服を着せるの？

あい あなただっけ着るのよ。持ってきたんでしよう。日当たりのいいところに出しておかないと皺とれないわよ。

京子 ・・・脱ごうと思えば脱げるもの。

勝子 お通夜や葬式からは逃げられやしないのよ。

旅行鞆を抱えて女が現れる。

女 お世話になりました。

京子 《お父さん》に会うの？

女 いいえ。

京子 なぜ？

女 そう決心したから。

京子 行こうと思えばいけるのに。

女 《帰る》

京子 帰るのって、負けじゃないの。

女 勝つたらどうなるの？

京子 ・・・。

女 わたし、帰ります。母がいるから・・・。

勝子 そう・・・ごめんなさいね・・・いろいろ・・・。

久子 (京子に) あんた、服も着ないで・・・どこかへ行く気？

京子 どこかへ行くわ。

久子 何にもありやしないよ。

京子 行く。すごいじゃない。何もなんて。これから何か始められるんだから。見たこともないこと見られて、聞いたことないこと知ることができる。

久子 じゃあ、早く行きなさいよ。

京子 行くわ・・・もうじき・・・。

久子 一人になるのよ・・・。

女 あの、じゃあ・・・。

勝子 ねえ、海に行きましようか。

真美 また、思いつき・・・。

勝子 (女に) ねえ、せめて、少しくらい付き合つてよ。朝ご飯は途中のコンビニで買って、

真美 充分すぎるほど付き合せてでしょう。

勝子 (かまわず) みんなで、いつだったかの夏、海に行つたでしょう。、あい何かまだ小さくて私が浮き輪を引つ張つて、泳いで泳いで岩だらけの島までくたくたになつてたどり着いて、その海岸から脇道を上つて、てっぺんの崖の上からこの民宿を眺めたじゃない・・・あの崖、何か名前付けたわよね。あのころあんた達、赤毛のアンにはまつてさ、あいが思いついた名前があんまり恥ずかしくてみんなで大笑いしたわね・・・そしてみんなであいを笑つたわね。

あい そうだっけ？

勝子 確か、夢と友情の岬とか・・・(笑う)

真美が一人黙っている。

真美
・
・

勝子 (真美を見て) ・ ・ ・ もしかして、たぶん、そう？

真美 ・ ・ ・ 違うわ、それ、しーちゃんよ、たぶん ・ ・ ・ 。

間

あい 行こうか。そこへ。

真美 何で。

あい あのさー、家族で居ることのメリットってしんどいときに一緒にいることでしょう。世間でさ、誰にもいえない自分だけのしんどいことを持ちこたえた時、一人で居なくていいためにあるようなもんじゃない。

真美 だから馬鹿なのよ。一人つきりになる人はどうするのよ。

あい だから、たまに誰かとお飯一緒にたべるんじゃない？

真美 ずっと一人で食べる人もいるでしょう。

勝子 だからさ、今、嘘でもいいから付き合ってよ。あなたも、

女 私泳げません ・ ・ ・

真美 馬鹿ばかりよね。冬場に泳ごうって言うんだから。水着さえないのに。そんなことにも気付かなかったの、姉さん。

勝子 嘘でもいいって言ったでしょう。だって、ここには二度と集まらないんだから ・ ・ ・ 。

久子 ・ ・ ・ しーちゃんは？

間

あい
(階下に声をかける) しーちゃん!

階下でアランの首輪の鈴の音が幽かに聞こえる。

溶暗

終